

# パラリンピック選手の競技環境

その意識と実態調査

## 報告書

2008年8月

日本パラリンピアンズ協会

# 目次

■調査企画	1
■調査結果の内容	7

## I パラリンピック選手に聞く練習の状況（時間・場所・費用）

1. 練習時間	9
1-1. 普段どれくらい練習しているか	9
1-2. 練習をするのは週末か平日か	10
1-3. 練習をする時間帯	12
2. 練習場所	13
3. 競技スポーツを行うためにかかる費用	14
3-1. 競技スポーツを行うためにかかるのはどのような費用か	14
3-2. 競技スポーツにかかる費用のうち、金額が多いもの	15
3-3. 競技スポーツにかかる費用のうち、自身が負担しているもの	16
3-4. 一年間に、競技のために個人負担する費用	17

## II パラリンピック選手としての苦労や励みになること

1. なぜ現在の競技スポーツを始めようと思ったのか（自由回答）	18
2. 現在の競技スポーツをどのようにして始めたのか（自由回答）	20
3. 現在の競技スポーツを行ってきて、苦労したこと	22
4. パラリンピック選手とオリンピック選手では何が違うと思うか	23
5. パラリンピック選手として特に励みになること	24

## III パラリンピック選手をとりまく環境（コーチ）

1. 専任コーチ	25
1-1. 専任（パーソナル）コーチ・トレーナーがいるか	25
1-2. パラリンピックに専任コーチ・トレーナーを同行させたいと思うか	27
1-3. 専任コーチは必要だと思うか	28

## IV 選手会等への期待

1. 「日本パラリンピアンズ協会」（選手会）に期待する活動は何か	29
2. 「アスリート委員会」	30
2-1. 「アスリート委員会」の認知度	30
2-2. 「アスリート委員会」に日本から代表を送り出したいと思うか	31

## V パラリンピックや障害者スポーツの今後について要望や夢

1. パラリンピックや障害者スポーツの今後についての要望や夢（自由回答）	32
--------------------------------------	----

# 調査企画

## 1. 調査目的

この調査は、日本のパラリンピック・アスリートが置かれている状況や課題を整理し、競技環境の改善のための活動に資する基礎資料を得ることを目的としました。

## 2. 調査対象

2008年北京パラリンピック代表第一次決定選手  
2010年バンクーバー大会強化指定選手

## 3. サンプル数

発送数	196
有効回収数	152
回収率	77.6%

## 4. 調査方法

競技団体を通じて調査票を配布、本人が記入の後、郵送で回収一部、FAX、インターネットのメールで送付・回収

## 5. 調査期間

2008年6月8日～同6月23日

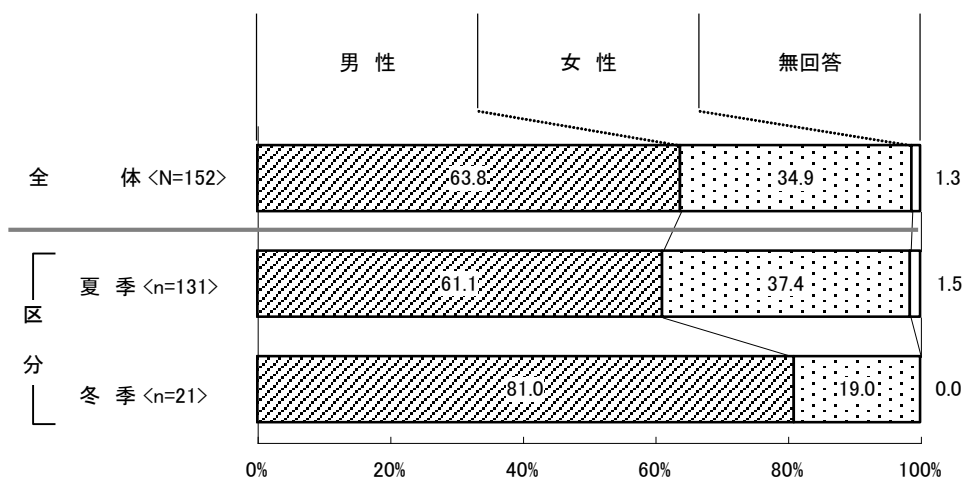
## 6. 調査実施機関

日本パラリンピアンズ協会  
協力 株式会社 電通パブリック リレーションズ

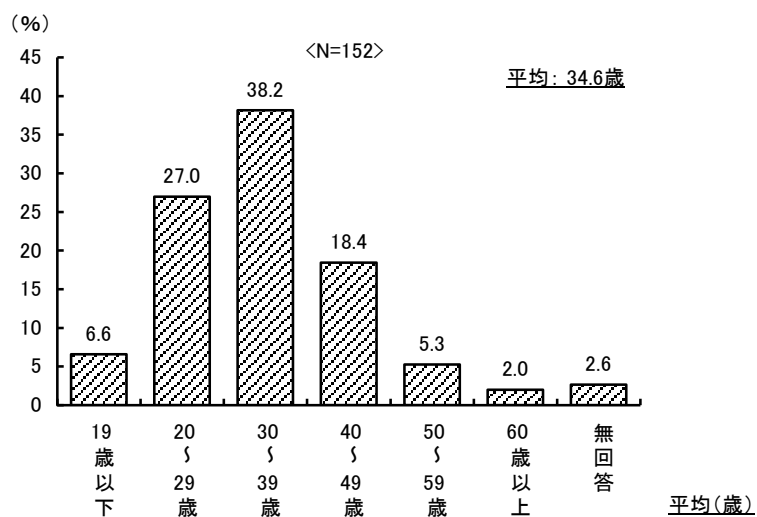
## 7. パラリンピック選手のプロフィール(標本構成)

有効回収 152 名の標本構成は以下の通り。

### ①性別



### ②年齢



区分	平均(歳)							
	夏季 <n=131>	6.9	26.0	37.4	20.6	5.3	1.5	2.3
冬季 <n=21>	4.8	33.3	42.9	4.8	4.8	4.8	4.8	33.6

③競技名

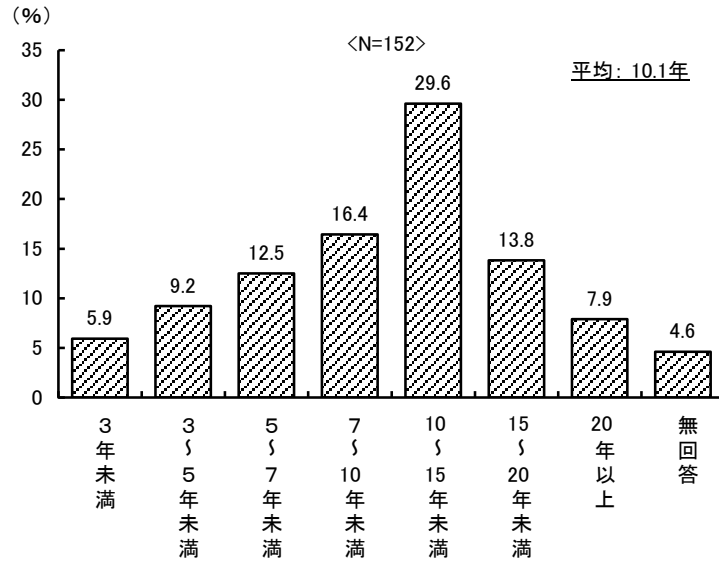
<夏季>

	サンプル数		
	全体	性別	
		男性	女性
夏季競技	131	80	49
陸上競技(トラック)	6	3	3
陸上競技(フィールド)	18	13	4
陸上競技(マラソン)	3	3	-
水泳	15	6	9
車いすテニス	1	1	-
ボッチャ	3	3	-
卓球	2	1	1
柔道	8	5	3
セーリング	-	-	-
パワーリフティング	1	1	-
射撃	5	2	3
自転車	3	3	-
アーチェリー	7	3	4
馬術	1	1	-
ゴールボール	2	-	2
車いすフェンシング	1	1	-
車椅子バスケットボール	24	12	12
視覚障害者5人制サッカー	-	-	-
脳性麻痺者7人制サッカー	-	-	-
ウィルチェアーラグビー	9	9	-
シッティングバレーボール	16	10	6
ボート	1	-	1
無回答	5	3	1

<冬季>

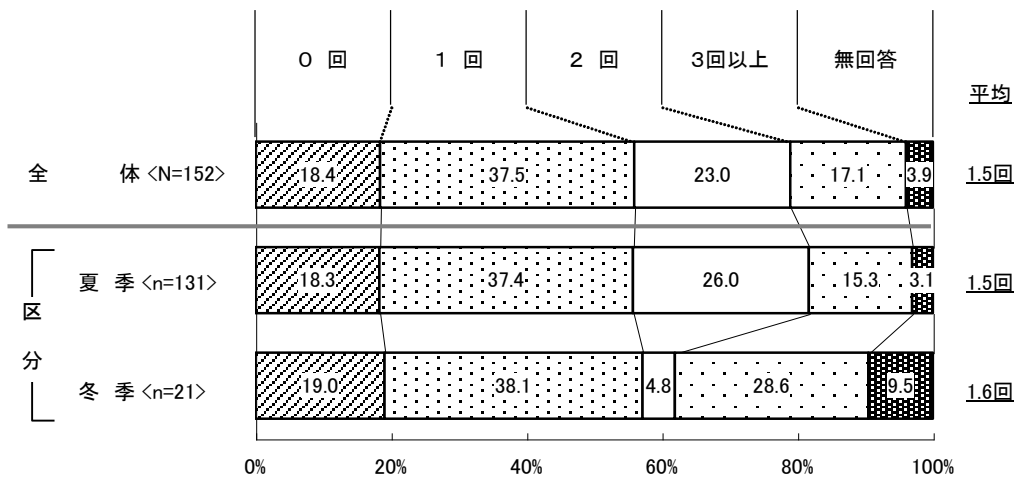
	サンプル数		
	全体	性別	
		男性	女性
冬季競技	21	17	4
アルペンスキー	10	7	3
ノルディックスキー	6	5	1
アイススレッジホッケー	5	5	-
車いすカーリング	-	-	-

④競技歴

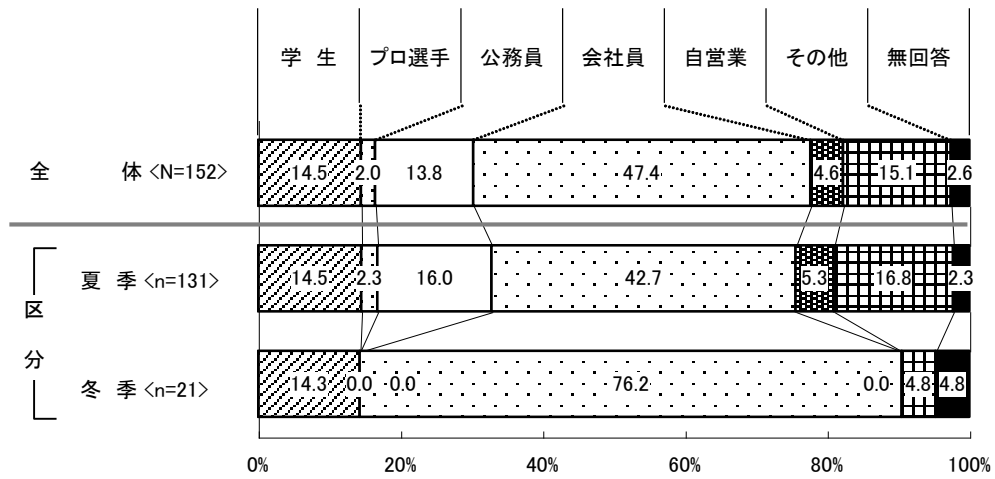


区分	平均(年)								
	夏季 <n=131>	6.1	9.2	12.2	18.3	28.2	13.7	8.4	3.8
冬季 <n=21>	4.8	9.5	14.3	4.8	38.1	14.3	4.8	9.5	10.5

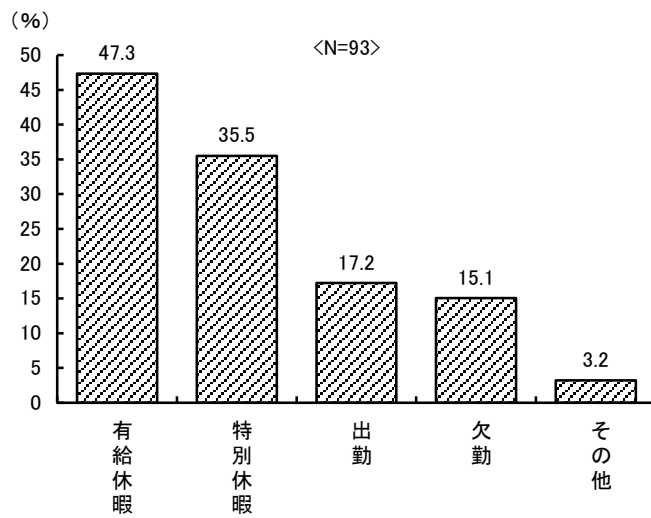
⑤これまでにパラリンピックに出場した回数



⑥職業



⑥-1. 平日に合宿や遠征で職場を留守にする時の出欠の扱い(公務員・会社員のみ)



区分	夏季 <n=77>	50.6	35.1	11.7	18.2	2.6
冬季 <n=16>	31.3	37.5	43.8	-	6.3	





## 調査結果の内容

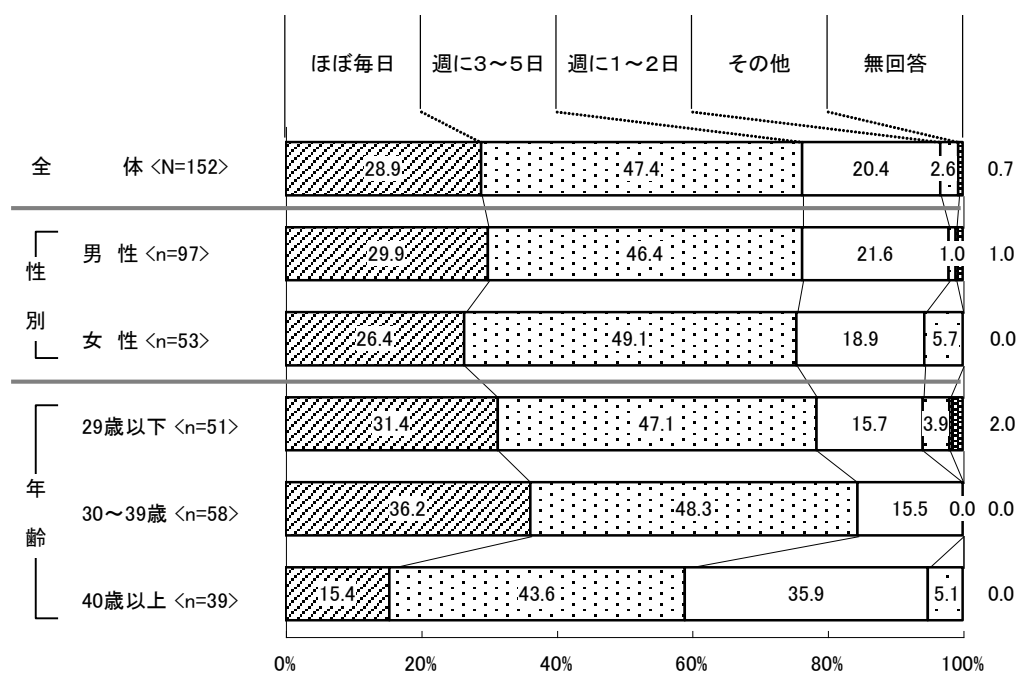


## 1. 練習時間

## 1-1. 普段どれくらい練習しているか（シーズンがある場合は、シーズン中について）

「週に3～5日」(47.4%)が最も多いが、「ほぼ毎日」も3割弱(28.9%)

図 1. 普段どれくらい練習しているか（シーズンがある場合は、シーズン中について）



普段どれくらい練習しているか聞いてみたところ、「週に3～5日」(47.4%)を約半数があげて最も多くなっていますが、「ほぼ毎日」(28.9%)練習している人も3割弱みられます。

年齢別でみると、「40歳以上」は「ほぼ毎日」(15.4%)という人が他の年代に比べて少なく、「週に1～2日」(35.9%)が多くなっています。

※なお、属性別のサンプル数が少ないため、考察は参考とお考え下さい（以下同じ）。

1-2. 練習をするのは週末か平日か

「平日」-----83.6%、「週末」-----77.0%

●組合せをみると、「週末と平日の両方」(61.2%)が6割強を占める

図 2. 練習をするのは週末か平日か① (複数回答)

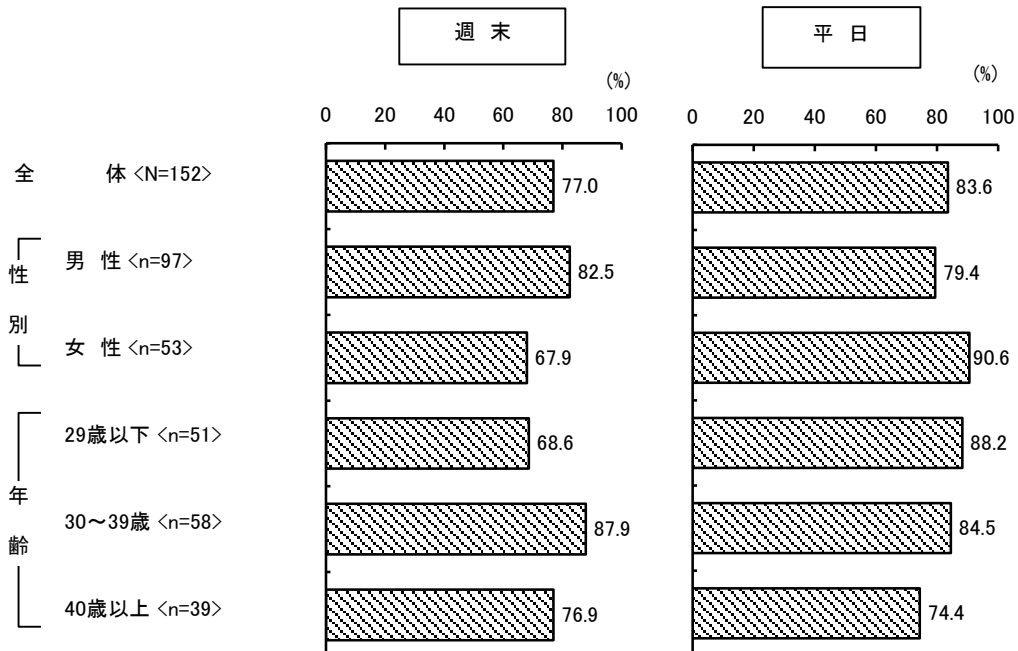
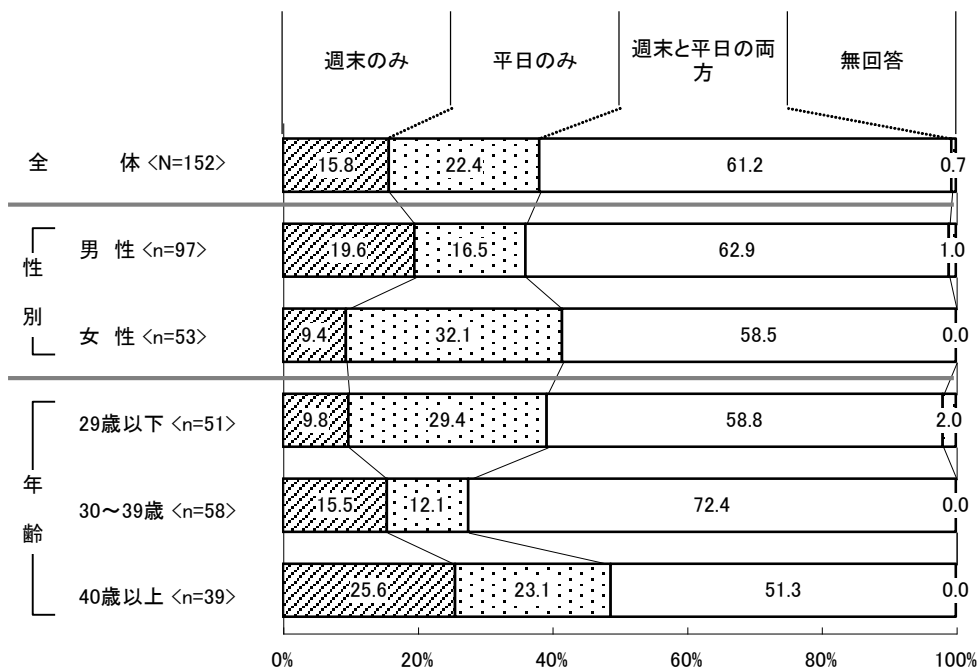


図 3. 練習をするのは週末か平日か② (複数回答)



次に、練習をするのは週末か平日か聞いてみたところ、「平日」が83.6%、「週末」が77.0%となっています。組合せ（パターン）をみると、「週末と平日の両方」（61.2%）という人が6割強で圧倒的に多くなっています。そのほかは「平日のみ」（22.4%）が2割強、「週末のみ」（15.8%）は1割強です。

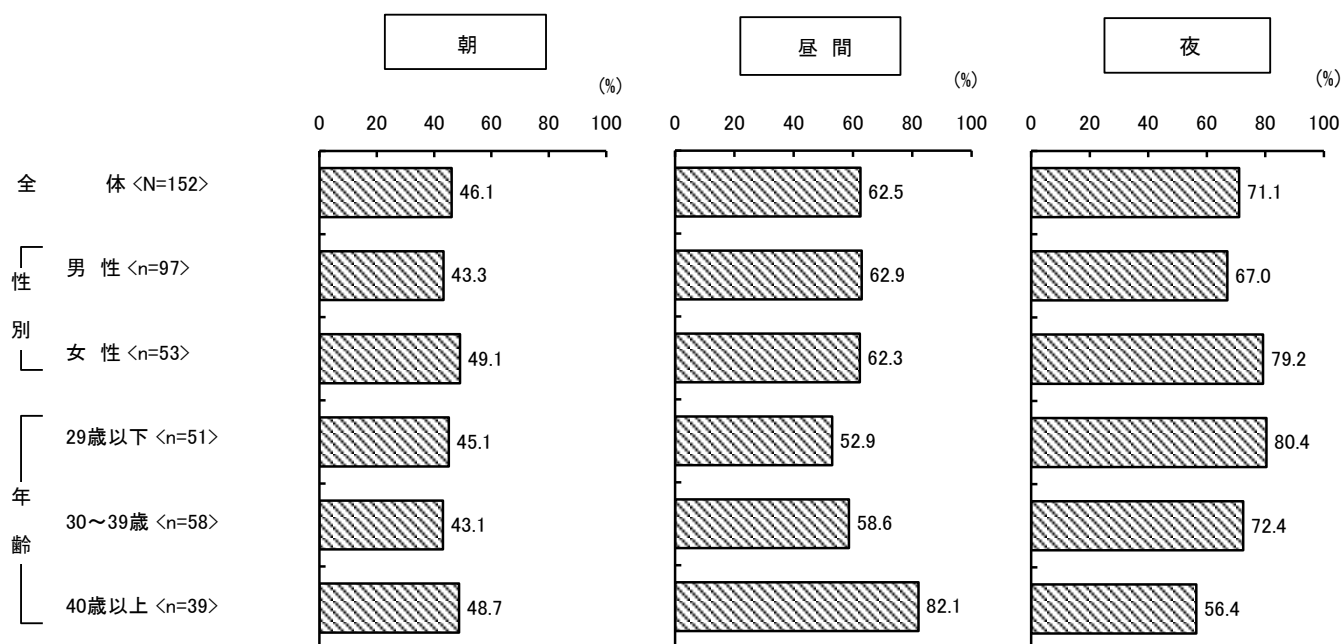
性別でみると、《女性》は「平日のみ」（32.1%）が《男性》（16.5%）に比べて多めです。

年齢別でみると、年齢が上の人ほど「週末のみ」の割合が高くなっています。

### 1-3. 練習をする時間帯

「朝」-----46.1%、「昼間」-----62.5%、「夜」-----71.1%

図 4. 練習をする時間帯（複数回答）



また、練習をする時間帯を聞いてみたところ、「夜」(71.1%)が7割強で最も多くなっています。「昼間」(62.5%)は6割強、「朝」(46.1%)が4割強です。

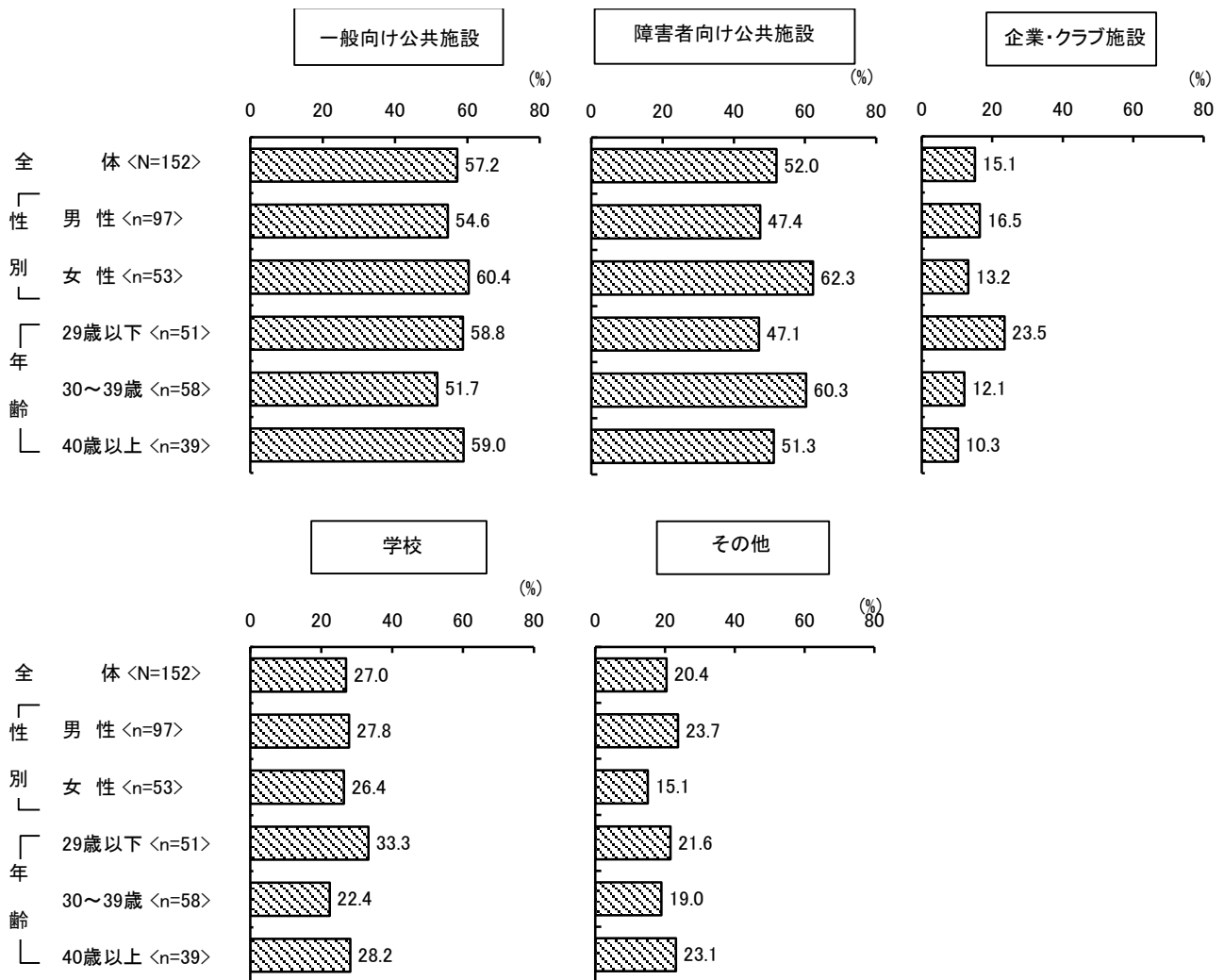
年齢別でみると、「40歳以上」は「昼間」(82.1%)が「夜」(56.4%)を上回って最も多くなっているのが目につきます。

また、夏季・冬季別でみると、「夏季」の選手は「夜」(76.3%)が最も高率ですが、「冬季」の場合は「夜」(38.1%)よりも「朝」(71.4%)、「昼間」(57.1%)のほうが高くなっています。

## 2. 練習場所

「一般向け公共施設」(57.2%)、「障害者向け公共施設」(52.0%)が多い

図 5. 練習場所（複数回答）



続いて練習場所について聞いてみたところ、「一般向け公共施設」(57.2%)、「障害者向け公共施設」(52.0%)の2つが半数を超えて多くなっています。以下「学校」(27.0%)、「企業・クラブ施設」(15.1%)が続き、「その他」(20.4%)には、「公道」「自宅」「公園」「スキー場」などがあげられています。

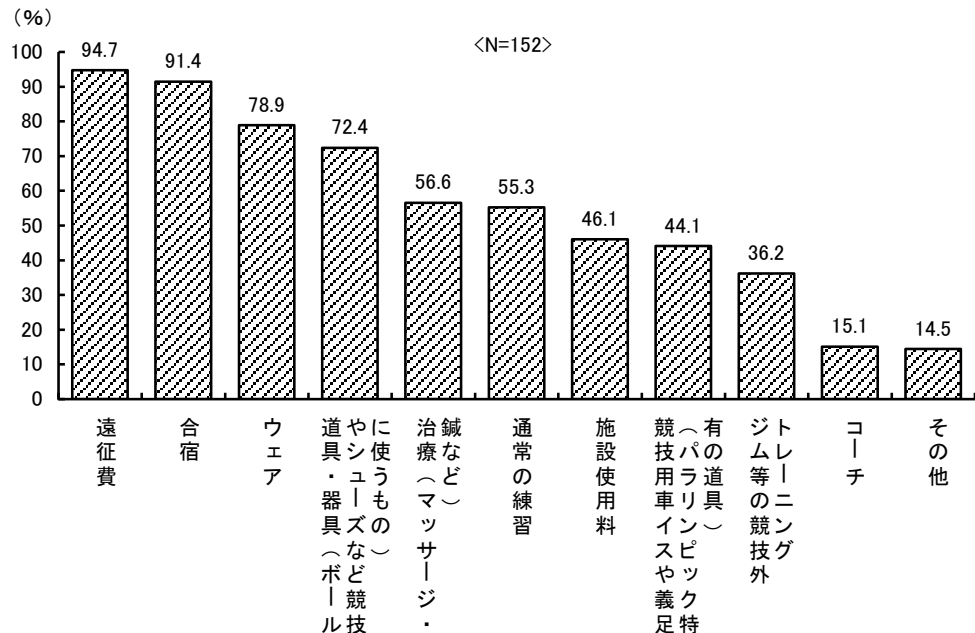
また、夏季・冬季別でみると、《冬季》の選手は「障害者向け公共施設」が皆無で、「企業・クラブ施設」(33.3%)と「その他」(42.9%)が《夏季》に比べて高くなっています。

### 3. 競技スポーツを行うためにかかる費用

#### 3-1. 競技スポーツを行うためにかかるのはどのような費用か

「遠征費」(94.7%)、「合宿」(91.4%)、「ウェア」(78.9%)、「道具・器具(ボールやシューズなど競技に使うもの)」(72.4%)など、費用は多岐にわたっている

図 6. 競技スポーツを行うためにかかるのはどのような費用か (複数回答)



性別	男性 <n=97>	96.9	89.7	76.3	78.4	52.6	58.8	44.3	47.4	35.1	11.3	12.4
女性 <n=53>	92.5	94.3	84.9	62.3	64.2	50.9	50.9	50.9	35.8	39.6	20.8	18.9

また、競技スポーツを行うためにかかるのはどのような費用か聞いてみたところ、「遠征費」(94.7%)が最も多く、次いで「合宿」(91.4%)も9割を超える人があげて、この2つが群を抜いて多くなっています。以下「ウェア」(78.9%)、「道具・器具(ボールやシューズなど競技に使うもの)」(72.4%)、「治療(マッサージ・鍼など)」(56.6%)、「通常の練習」(55.3%)が続き、以上の6項目は半数以上の人があげています。そのほか「施設使用料」(46.1%)、「競技用車イスや義足(パラリンピック特有の道具)」(44.1%)など、費用は多岐にわたっています。

性別による傾向の違いはありませんが、《男性》は「道具・器具(ボールやシューズなど競技に使うもの)」(78.4%)、「競技用車イスや義足(パラリンピック特有の道具)」(47.4%)が《女性》に比べて高く、《女性》は「治療(マッサージ・鍼など)」(64.2%)、「コーチ」(20.8%)が高めです。

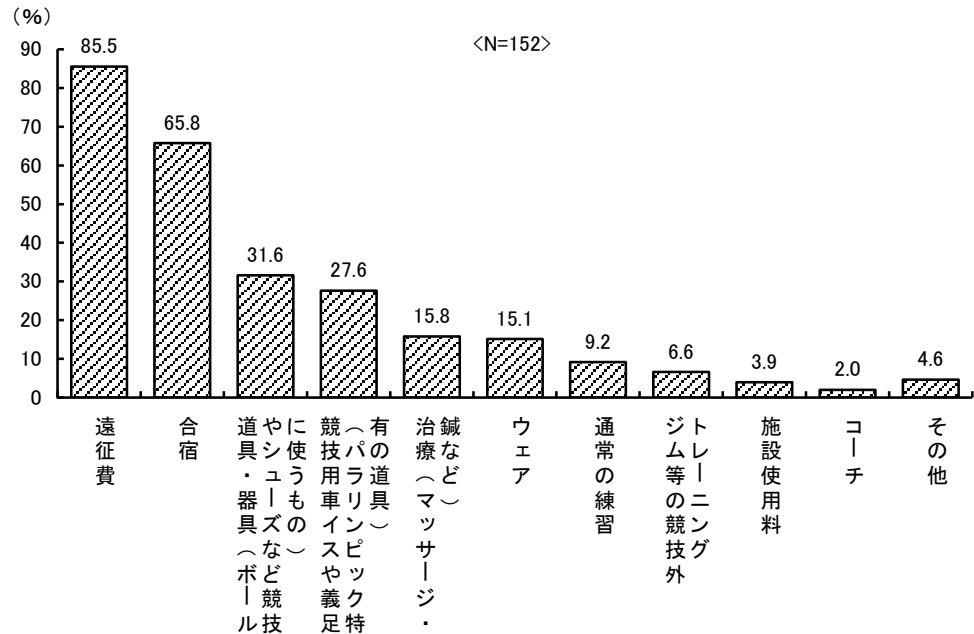
また夏季・冬季別では、どの費用とも《冬季》の方が高率で、特に「コーチ」(夏季9.2%、冬季52.4%)は差が大きくなっています。



### 3-2. 競技スポーツにかかる費用のうち、金額が多いもの

「遠征費」(85.5%)を8割強があげて最も多く、以下「合宿」(65.8%)、「道具・器具(ボールやシューズなど競技に使うもの)」(31.6%)、「競技用車イスや義足(パラリンピック特有の道具)」(27.6%)が続く

図 7. 競技スポーツにかかる費用のうち、金額が多いもの (回答は3つまで)



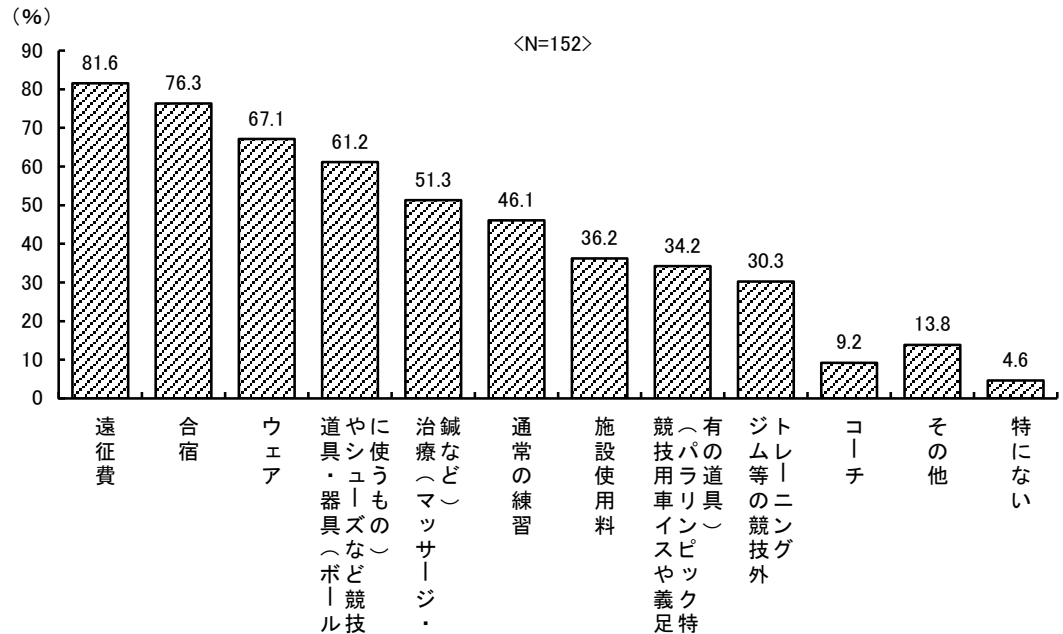
性別	男性 <n=97>	88.7	63.9	37.1	29.9	13.4	14.4	11.3	4.1	3.1	-	3.1
	女性 <n=53>	81.1	69.8	22.6	24.5	18.9	17.0	5.7	11.3	5.7	5.7	7.5

では、競技スポーツにかかる費用のうち、金額が多いものは何でしょうか。3つまであげてもらったところ、「遠征費」(85.5%)をあげる人が8割強で最も多く、次いで「合宿」(65.8%)が6割強と、この2つが中心になっています。以下「道具・器具(ボールやシューズなど競技に使うもの)」(31.6%)、「競技用車イスや義足(パラリンピック特有の道具)」(27.6%)、「治療(マッサージ・鍼など)」(15.8%)、「ウェア」(15.1%)が続いています。

### 3-3. 競技スポーツにかかる費用のうち、自身が負担しているもの

5人に3人以上が、「遠征費」(81.6%)、「合宿」(76.3%)、「ウェア」(67.1%)、「道具・器具(ボールやシューズなど競技に使うもの)」(61.2%)を自己負担

図 8. 競技スポーツにかかる費用のうち、自身が負担しているもの (複数回答)



性別	男性 <n=97>	82.5	75.3	63.9	64.9	47.4	49.5	34.0	36.1	28.9	6.2	11.3	4.1
女性 <n=53>	81.1	79.2	73.6	54.7	58.5	41.5	41.5	30.2	34.0	15.1	18.9	5.7	

さらに、競技スポーツにかかる費用のうち、自身が負担しているのはどれか聞いてみたところ、「遠征費」(81.6%)が8割強で最も多くなっています。以下「合宿」(76.3%)、「ウェア」(67.1%)、「道具・器具(ボールやシューズなど競技に使うもの)」(61.2%)、「治療(マッサージ・鍼など)」(51.3%)が続いています。

なお、項目別に自己負担率(費用がかかる人の何%が自己負担しているか)をみると、

#### <自己負担率>

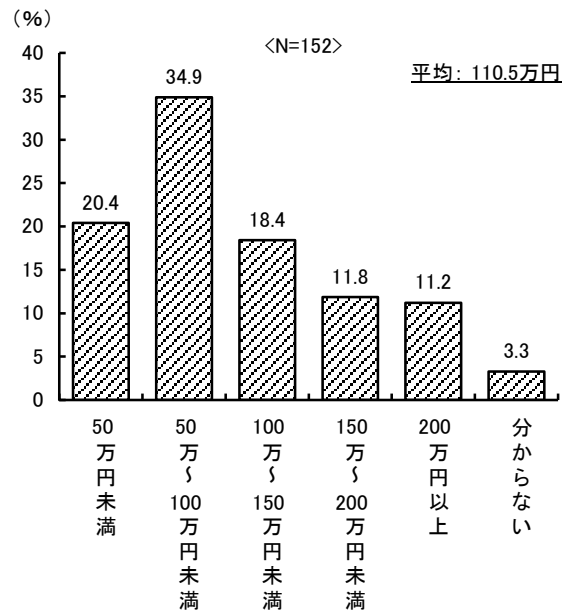
「治療(マッサージ・鍼など)」	86名	90.7%
「遠征費」	144名	86.1%
「ウェア」	120名	85.0%
「道具・器具」	110名	84.5%
「ジム等の競技外トレーニング」	55名	83.6%
「合宿」	139名	83.5%
「通常の練習」	84名	83.3%
「施設使用料」	70名	78.6%
「競技用車イスや義足」	67名	77.6%
「コーチ」	23名	60.9%

となっています。

### 3-4. 一年間に、競技のために個人負担する費用

「50万～100万円未満」(34.9%)個人負担している人が多く、平均は「110.5万円」

図 9. 一年間に、競技のために個人負担する費用



一年間に、競技のために個人負担する費用は合計どれくらいか聞いてみたところ、「50万～100万円未満」(34.9%)が最も多く、以下「50万円未満」(20.4%)、「100万～150万円未満」(18.4%)、「150万～200万円未満」(11.8%)、「200万円以上」(11.2%)となっています。平均は「110.5万円」です。

性別で平均額をみると、《男性》(111.9万円)と《女性》(104.7万円)にあまり差はありません。

夏季・冬季別では、《冬季》(163.1万円)の方が《夏季》(101.7万円)より平均額が60万円強高くなっています。

## II パラリンピック選手としての苦労や励みになること

### 1. なぜ現在の競技スポーツを始めようと思ったのか（自由回答）

「周囲の人から勧められて」「障害を持つ前からやっていた」「リハビリとして」「パラリンピックを見て」「健常者と一緒に行ける」「自分の障害に合っている」など

#### ■回答（抜粋）

- ・友人に誘われて（車椅子バスケットボール）
- ・病院に入院した時、車椅子の人に誘われて（車椅子バスケットボール）
- ・いところがシッティングバレーボールという競技を知っていて、自分が中学校・高校とバレーをやっていたのを知っており、勧められた（シッティングバレーボール）
- ・親の紹介（水泳）
- ・スポーツセンターの指導員に誘われた（陸上・フィールド）
- ・障害者交流センターからの紹介（ウィルチェアーラグビー）
- ・友人の紹介でやってみたら意外と楽しかった。30歳になった時に自分のために何かしたいと思い、大好きなスポーツをいろいろ紹介してもらい経験して、この競技に出会った（シッティングバレーボール）
- ・監督に勧められて（車いすフェンシング）
- ・3歳の時に近くにあったスイミングスクールに親が入れたのがきっかけ。小学校に入るときには、タイムを競うことの楽しさが分かり、自ら積極的に取り組むようになった（水泳）
- ・県職員に勧められた（シッティングバレーボール）
- ・入所中の施設の指導員に勧められた（ボッチャ）
- ・大学入学をきっかけに競技チームへの加入を勧められた。パラリンピックの存在を聞いて、自分も挑戦したいと思った（アルペンスキー）
- ・受傷する前からバスケットボールをしていたため（車椅子バスケットボール）
- ・もともと立位のバレーボールをやっていたため（シッティングバレーボール）
- ・脳梗塞で倒れるまで水泳の選手コースに属していたため（水泳）
- ・障害を持つ前にも同じ競技をしていたので（シッティングバレーボール）
- ・健常者の頃から続けていたスポーツだったため、自然に（ノルディックスキー）
- ・もともとラグビーをやっていて、ぶつかりあったりする激しいスポーツが好きだったため（アイスレジャホッケー）
- ・身体の常態を保つため、自分に合うスポーツにした。ストレス発散にもなる（アーチェリー）
- ・リハビリのため（陸上・マラソン）
- ・小さい頃からスポーツをするのが当たり前で、障害を負ってからも自分にできるスポーツを探すのが当たり前だった。自分の記録を更新していく中で、競技としてのスポーツに出会った（陸上・フィールド）
- ・体力づくり（陸上・フィールド）
- ・病気の治療目的。やっているうちに楽しくなってきた、日の丸をつけたいと思うようになった（水泳）
- ・運動不足解消のため（水泳）
- ・小学生の頃、バルセロナオリンピックの柔道をテレビで観て（柔道）
- ・走っているのを見て感動した（陸上・トラック）
- ・自転車が好きで、パラリンピック種目であったため（自転車）
- ・両親がパラリンピックに出てほしいということで始めた（柔道）
- ・この競技でパラリンピックに行った選手がいなかったから（陸上・フィールド）

- ・県内にアーチェリーのパラリンピックメダリストがおり、何かスポーツをしたいと思っていたので見学に行き、競技している姿に感動し、始めようと思った（アーチェリー）
- ・アテネパラリンピックを見て、もう一度水泳をしたいと思った（水泳）
- ・ポスターで障害者スキーを知り、パラリンピックを目指したいと思い始めた（アルペンスキー）
- ・長野パラリンピックでクロスカントリースキーの新田選手を見たのがきっかけ（ノルディックスキー）
- ・足が不自由になった後、何かスポーツをしたいと思い、このスポーツに出会った。長野パラリンピックという目標があり、やりがいもあった（アイススレッジホッケー）
- ・日本にて冬季のパラリンピックが初めて開催されるのを知って、チャレンジしようと思った（アイススレッジホッケー）
- ・自分にできる、楽しめる内容だから（陸上・フィールド）
- ・生きがい。メダルを取得できたことで喜びを実感し、人にも希望を与えられるため（柔道）
- ・走ることが好きだから（陸上・マラソン）
- ・体を動かすことが好きで、入所した施設でクラブ活動があったから（ウィルチェアーラグビー）
- ・スポーツが好きだから（シッティングバレーボール）
- ・小学校中学年より車椅子生活となり、車椅子利用者でも健常者と対等に戦いやすい卓球を選んだ。また障害の状態からハードなスポーツは難しいため、細かい技術・戦術などで勝利しやすいところに魅力を感じた（卓球）
- ・自分の能力を最大限引き出すことができるから（水泳）
- ・健常者とハンディがないため（アーチェリー）
- ・中学生から部活動として始めた（陸上・フィールド）
- ・健常者も障害者も一緒にできるから（シッティングバレーボール）
- ・自分の障害レベルでできる競技の中で、激しさ・スピードなどに魅力を感じた（ウィルチェアーラグビー）
- ・大学生で充実していた時期に病気で足を切断し、将来が見えなくなった。そこでその状況を打破するために目標や夢を見つけようと思った（陸上・フィールド）
- ・自分の障害に合っているから。チームスポーツだから（ウィルチェアーラグビー）

## 2. 現在の競技スポーツをどのようにして始めたのか（自由回答）

「リハビリ指導員など周囲の人の紹介」「自分でスポーツ教室やチームを探した」「インターネットや新聞などの告知を見て」「学校の授業」などの回答があげられている

### ■回答（抜粋）

- ・リハビリ入院中に友達に紹介された（陸上・フィールド）
- ・入院先の医者や、実際の競技者からの勧誘（車椅子バスケットボール）
- ・知人の紹介で見学に行った（車椅子バスケットボール）
- ・親の勧めで（水泳）
- ・技師の紹介で（シッティングバレーボール）
- ・障害者水泳に関わっていたコーチに声をかけてもらった（水泳）
- ・ゴールボール部の部長をやっていた先輩に誘われて見学した（ゴールボール）
- ・学校の先生に勧められ（学校として都大会などへ出ていたので）始めた。その結果、国体からパラリンピックの選手に選ばれ、今まで続いている（陸上・フィールド）
- ・OT（作業療法士）、PT（理学療法士）からリハビリとして紹介され、今の障害者チームに出会った（水泳）
- ・スポーツリハビリを受けていた指導員の勧め（車椅子バスケットボール）
- ・リハビリのために母が習わせてくれた（水泳）
- ・両親から健康のために勧められた（陸上・フィールド）
- ・障害者スポーツセンターの職員に誘われた（シッティングバレーボール）
- ・盲学校の教員の勧め（柔道）
- ・友人の勧め。職場にも経験したことがある人がいた（シッティングバレーボール）
- ・入院先の受付にクラブチームの人がいて、勧誘された（車椅子バスケットボール）
- ・入所中の施設の指導員に勧められた（ボッチャ）
- ・競技を紹介してくれた体育教官が伴走してくれ、障害者スキー全国大会に参加した（アルペンスキー）
- ・障害者の会があり、今のスポーツをしていたので自分から声をかけてやり始めた（アーチェリー）
- ・知り合いのスポーツ教室に行った（柔道）
- ・スポーツ教室を自分で探した（ボッチャ）
- ・先天性の障害で、小学校より養護学校生活のため、いろいろなスポーツを普通の子供と同じように始め、気に入った卓球を選んだ（卓球）
- ・障害者スポーツ大会（国体）に陸上選手で参加したときに、車椅子バスケチームに自分から声をかけた（車椅子バスケットボール）
- ・高校の時に車椅子バスケを知り、市役所に問い合わせ、市役所から名古屋の体育館を教えてもらい、今のクラブを知った（車椅子バスケットボール）
- ・友人にいくつかの競技スポーツを紹介してもらい、一番楽しく自分に合っていると思ったので始めた。実際には機会が少なく、自分でチームを起し継続することになった（シッティングバレーボール）
- ・自分で探した。障害者スポーツ大会を機に知った（射撃）
- ・入院中に初めて見学して、退院後職リハへ入所し、クラブへ入部、地元へ帰ってチームを結成した（ウィルチェアーラグビー）
- ・自分でインターネットを検索し、初めは障害者スポーツセンターに行った。そこで出会いを通じて（義足を作るなど）、競技スポーツへ（陸上・フィールド）
- ・水泳のできるチームを自分で探し、入会した（水泳）
- ・自分で連盟に確認した。そこでチェアスキー協会を紹介してもらった（アルペンスキー）
- ・自分で情報を集めて、競技に参加するに至るまでを調べ、単身カナダへ行った。帰国後自分から協会に問い合わせ、ジャパン

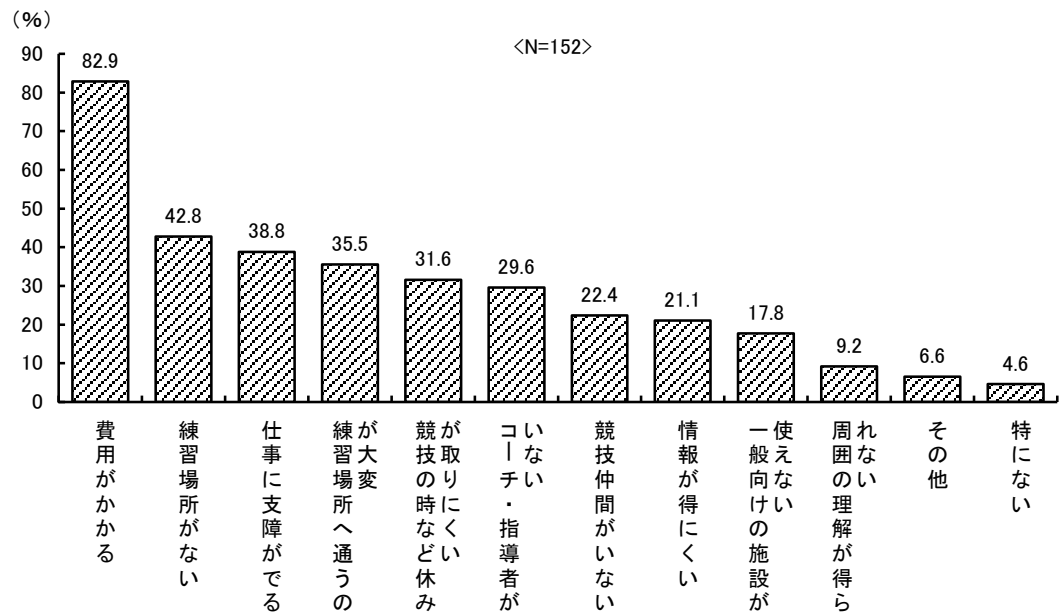
パラリンピックに出場した（ノルディックスキー）

- ・柔道連盟に電話して聞いた（柔道）
- ・リハビリテーションセンターでチェアスキーを見て、担当者に照会した。初心者講習会への参加を勧められ、初めてスキーをした（アルペンスキー）
- ・自分でスキーショップなどを周り、情報を集めてクラブチームに属した（アルペンスキー）
- ・地元開催の国体参加募集のポスターを見て（陸上・フィールド）
- ・パラリンピック競技で新しく採用されたことをIPC（国際パラリンピック委員会）のホームページで知り、団体をこれから設立するということから加わり始めた（競技名無回答）
- ・市の広報で、障害者クラスのあるスクールの存在を知った（アーチェリー）
- ・2001年に通っていた障害者スポーツセンターでアーチェリー教室の案内があり、スポーツセンターで知り合った人もアーチェリーをしていると聞き、興味を持った。ただ両手首が動かず、力もない自分にできるのか心配で、スポーツセンターの職員に相談すると、だめならやめればいんだからやってみたらと勧めてくれ、思い切って教室に参加した（アーチェリー）
- ・母の友人からインターネットのサイトを教えてもらった。その競技の会長に連絡をとり、練習を見に行った（シッティングバレーボール）
- ・国立リハビリテーションセンターで見かけたから（ウィルチェアーラグビー）
- ・新聞で障害者スポーツを見て、体育館に見学に行った（卓球）
- ・スポーツセンターの広報誌を見て問い合わせた（自転車）
- ・「アクティブジャパン」という雑誌の記事を読み、講習会に参加した（車いすテニス）
- ・「車椅子バスケ体験講座」という記事が地域の新聞に出ていて、それに参加し誘ってもらった（車椅子バスケットボール）
- ・長野にてパラリンピック開催があるので、選手育成の応募に参加した（アイススレッジホッケー）
- ・盲学校での体育行事（秋期）（柔道）
- ・学校での体育の授業から始めた（柔道）
- ・スポーツ少年団（ノルディックスキー）

### 3. 現在の競技スポーツを行ってきて、苦勞したこと

何と言っても「費用がかかる」(82.9%)

図 10. 現在の競技スポーツを行ってきて、苦勞したこと（複数回答）



性別	男性 <n=97>	85.6	43.3	41.2	34.0	34.0	30.9	22.7	20.6	12.4	7.2	6.2	2.1
女性 <n=53>	77.4	43.4	34.0	37.7	28.3	28.3	22.6	18.9	28.3	13.2	7.5	9.4	

現在の競技スポーツを行ってきて、苦勞したのはどんなことか聞いてみたところ、「費用がかかる」(82.9%)を8割強の人があげて圧倒的に多くなっています。そのほかでは「練習場所がない」(42.8%)、「仕事に支障がでる」(38.8%)、「練習場所へ通うのが大変」(35.5%)、「競技の時など休みが取りにくい」(31.6%)、「コーチ・指導者がいない」(29.6%)、「競技仲間がいない」(22.4%)、「情報が得にくい」(21.1%)などがあげられています。

性別による傾向の違いはありませんが、「男性」は「費用がかかる」(85.6%)、「仕事に支障がでる」(41.2%)、「競技の時など休みが取りにくい」(34.0%)がより高く、「女性」は「一般向けの施設が使えない」(28.3%)、「周囲の理解が得られない」(13.2%)が高めです。

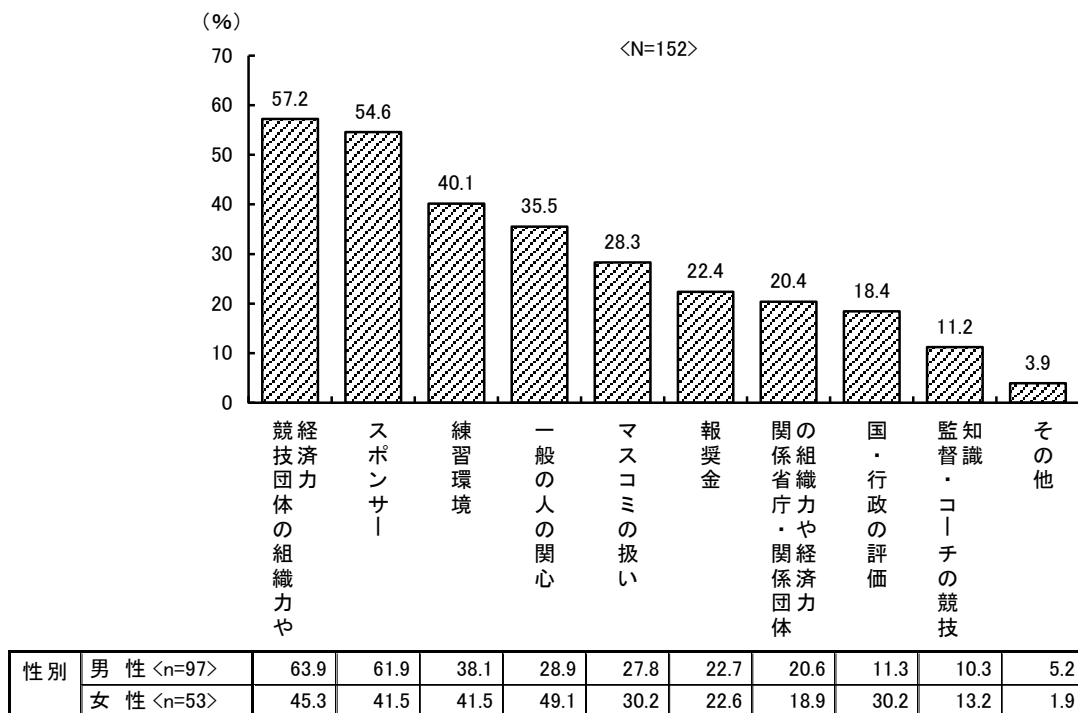
夏季・冬季別でみると、「夏季」は「コーチ・指導者がいない」(32.1%)、「一般向けの施設が使えない」(19.8%)が比較的高く、「冬季」は「費用がかかる」(100.0%)、「練習場所へ通うのが大変」(61.9%)、「競技の時など休みが取りにくい」(52.4%)が一層高率になっています。



#### 4. パラリンピック選手とオリンピック選手では何が違うと思うか

「競技団体の組織力や経済力」(57.2%)、「スポンサー」(54.6%)、「練習環境」(40.1%)がトップ3

図 11. パラリンピック選手とオリンピック選手では何が違うと思うか（回答は3つまで）



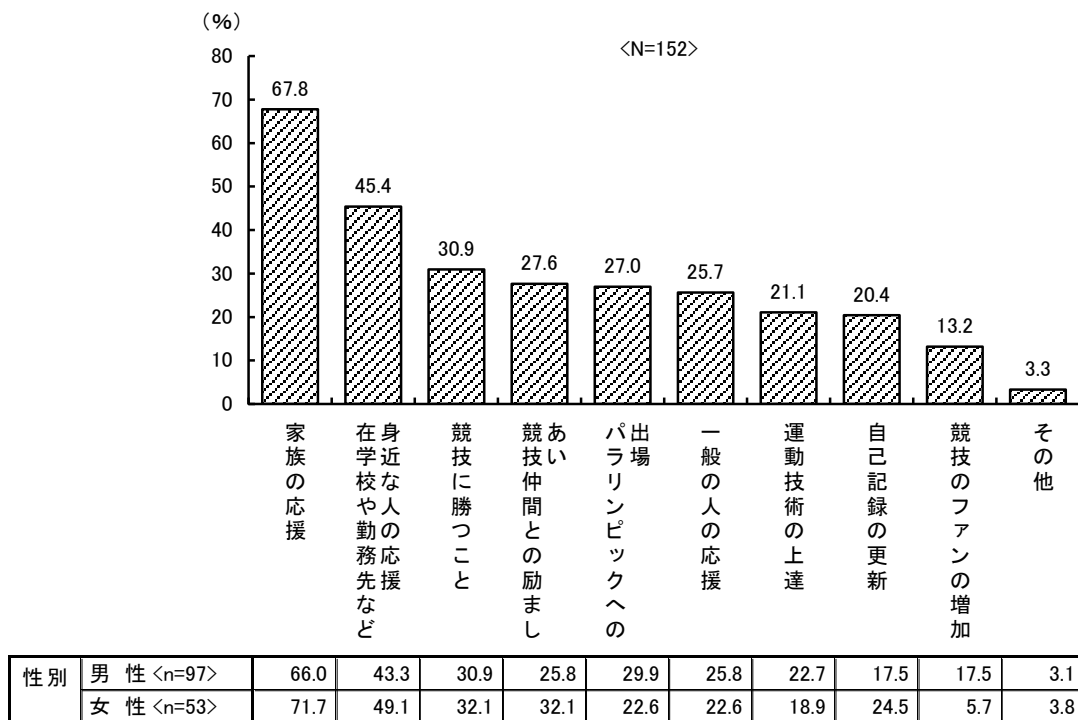
パラリンピック選手とオリンピック選手で、特に違いが大きいと思うことを3つまであげてもらったところ、「競技団体の組織力や経済力」(57.2%)が最も多く、続く「スポンサー」(54.6%)も半数を超えています。以下「練習環境」(40.1%)、「一般の人の関心」(35.5%)、「マスコミの扱い」(28.3%)、「報奨金」(22.4%)、「関係省庁・関係団体の組織力や経済力」(20.4%)、「国・行政の評価」(18.4%)、「監督・コーチの競技知識」(11.2%)の順となっています。前項の苦勞したことで第一にあげられた「費用がかかる」(82.9%)という実感の背景が語られているようです。

性別でみると、《男性》は「競技団体の組織力や経済力」(63.9%)、「スポンサー」(61.9%)が《女性》(45.3%、41.5%)を大きく上回っています。一方、《女性》は「一般の人の関心」(49.1%)、「国・行政の評価」(30.2%)が《男性》(28.9%、11.3%)を大きく上回っています。

## 5. パラリンピック選手として特に励みになること

第一に「家族の応援」(67.8%)。そして「在学や勤務先など身近な人の応援」(45.4%)

図 12. パラリンピック選手として特に励みになること (回答は3つまで)



パラリンピック選手としての自分にとって、特に励みになるのはどんなことか聞いてみたところ、「家族の応援」(67.8%)を7割弱の人があげて圧倒的に多くなっています。次いで「在学や勤務先など身近な人の応援」(45.4%)、また「一般の人の応援」をあげる人も25.7%みられ、身近な人や一般の人々の応援が何よりの励みになるようです。そのほか「競技に勝つこと」(30.9%)、「競技仲間との励ましあい」(27.6%)、「パラリンピックへの出場」(27.0%)などがあげられています。

性別でみると、《男性》は「競技のファンの増加」(17.5%)、「パラリンピックへの出場」(29.9%)が《女性》(5.7%、22.6%)を上回っており、《女性》は「競技仲間との励ましあい」(32.1%)、「自己記録の更新」(24.5%)が高めです。

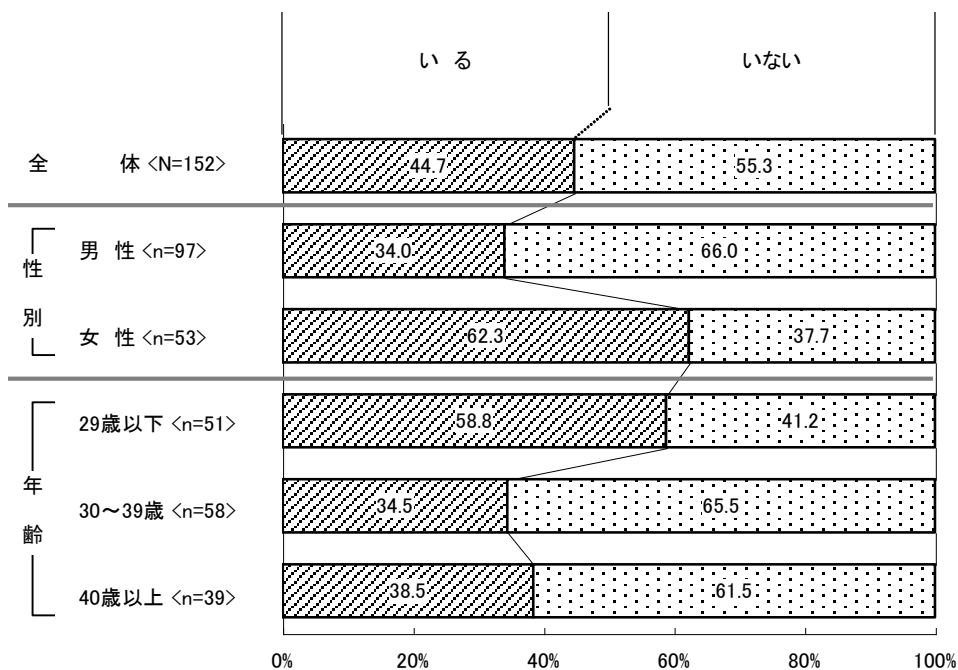
1. 専任コーチ

1-1. 専任（パーソナル）コーチ・トレーナーがいるか

「いる」(44.7%)割合は半数以下

●コーチは、「所属チームの監督・コーチ」(39.7%)、「障害者スポーツ競技団体のコーチ」(20.6%)などで、有料より「ボランティアのコーチ」(70.6%)が圧倒的に多い

図 13. 専任（パーソナル）コーチ・トレーナーがいるか



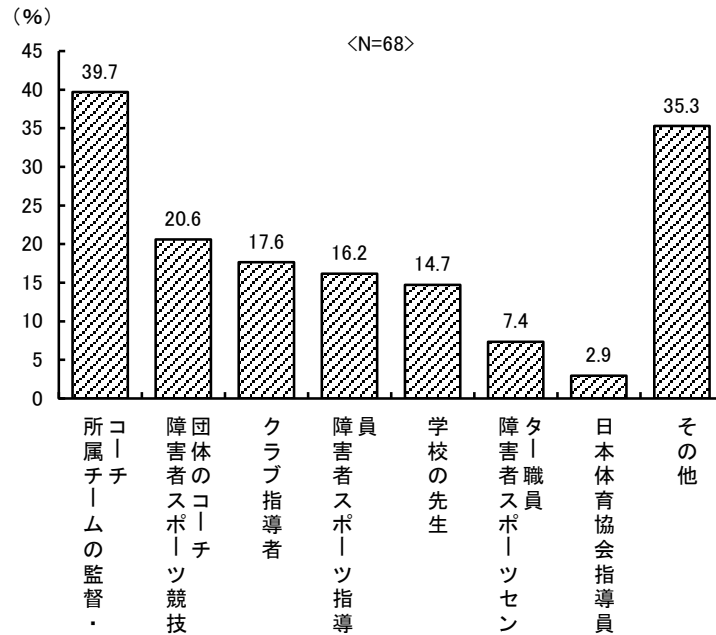
専任コーチ・トレーナーがいるか聞いてみたところ、「いる」(44.7%)選手は半数以下に止まっています。

性別で見ると、「いる」割合は《女性》(62.3%)の方が《男性》(34.0%)を大きく上回っています。

年齢別で見ると、《29歳以下》は「いる」(58.8%)が6割弱で、他の年代に比べて高率なのが目につきます。

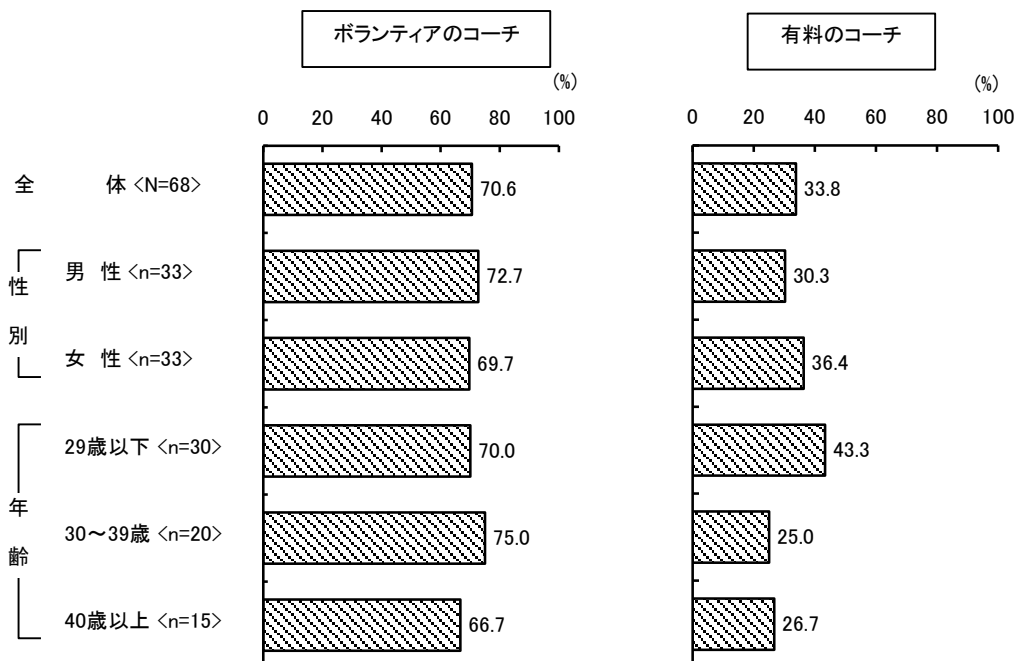
夏季・冬季別では、《夏季》の「いる」人が42.7%、《冬季》は57.1%です。

図 14. 専任コーチ・トレーナーはどのような人か（複数回答）



「いる」と答えた人（68名）に、専任コーチ・トレーナーはどのような人か聞いてみたところ、「所属チームの監督・コーチ」（39.7%）が4割弱で最も多く、以下「障害者スポーツ競技団体のコーチ」（20.6%）、「クラブ指導者」（17.6%）、「障害者スポーツ指導員」（16.2%）、「学校の先生」（14.7%）が続いています。

図 15. 専任コーチ・トレーナーは、ボランティアか、それとも有料のコーチか（複数回答）

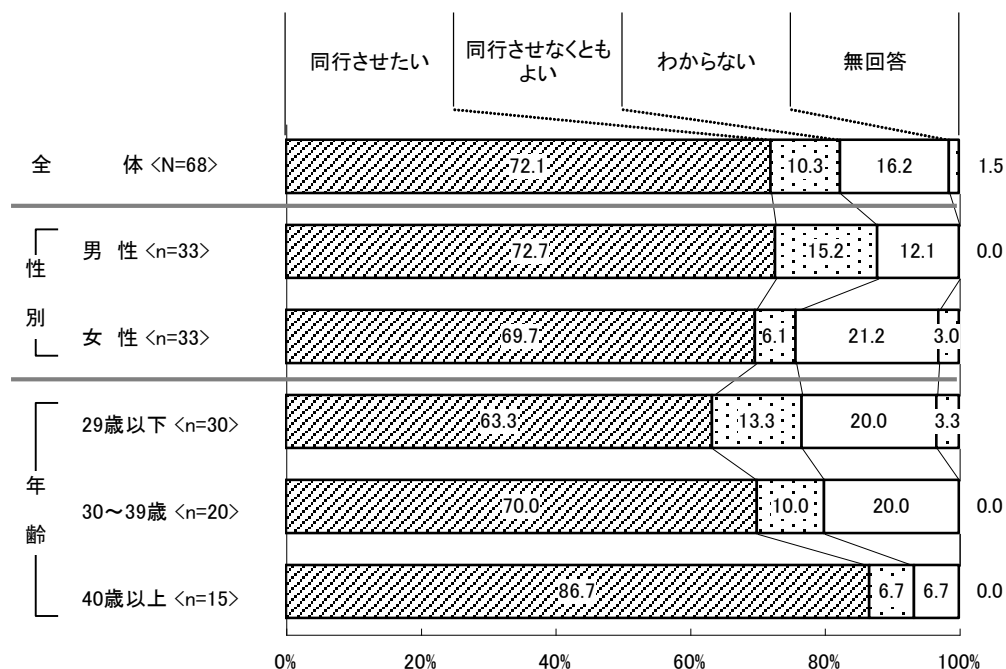


また、ボランティアか有料のコーチか聞いてみたところ、「ボランティアのコーチ」（70.6%）が7割にのぼり、「有料のコーチ」（33.8%）は3割強となっています。

## 1-2. パラリンピックに専任コーチ・トレーナーを同行させたいと思うか

「同行させたい」(72.1%)が大勢を占める

図 16. パラリンピックに専任コーチ・トレーナーを同行させたいと思うか



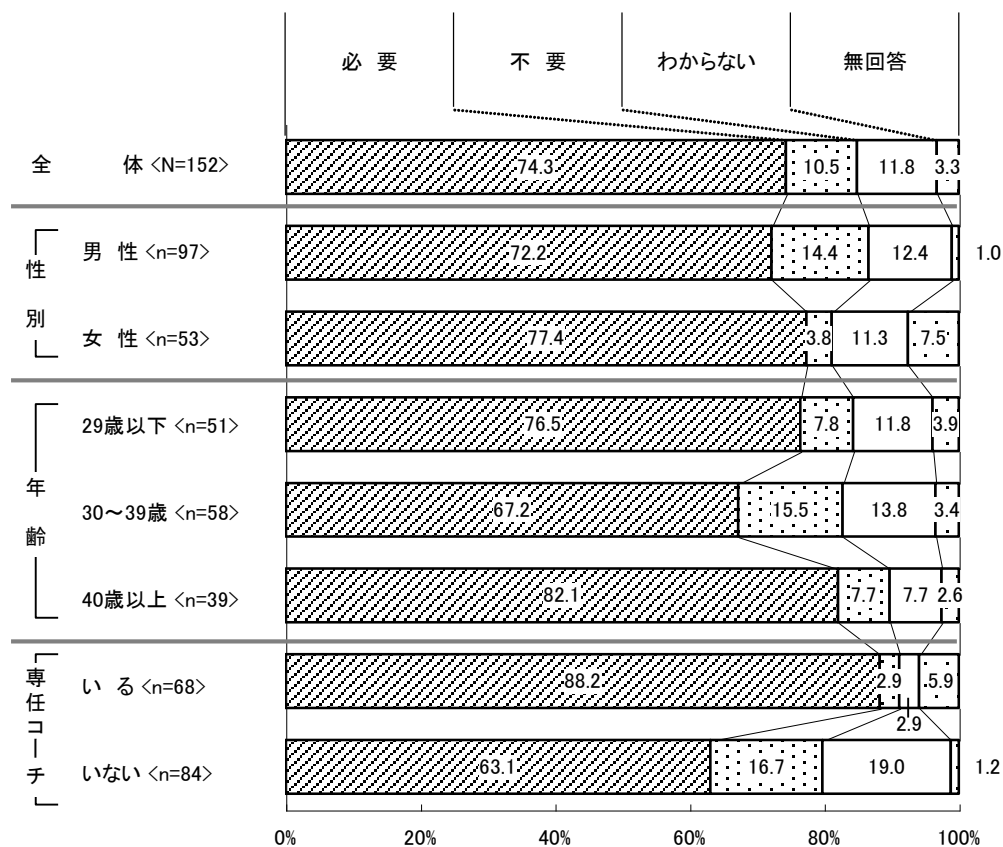
次に、パラリンピックに専任コーチ・トレーナーを同行させたいと思うか聞いてみたところ、「同行させたい」(72.1%)が7割強と大勢を占めています。

年齢別でみると、年齢が上の人ほど「同行させたい」割合が高くなっています。

### 1-3. 専任コーチは必要だと思うか

4人に3人が「必要」(74.3%)

図 17. 専任コーチは必要だと思うか



全員に、専任コーチは必要だと思うか聞いてみたところ、「必要」(74.3%)が4分の3と圧倒的に多くなっています。

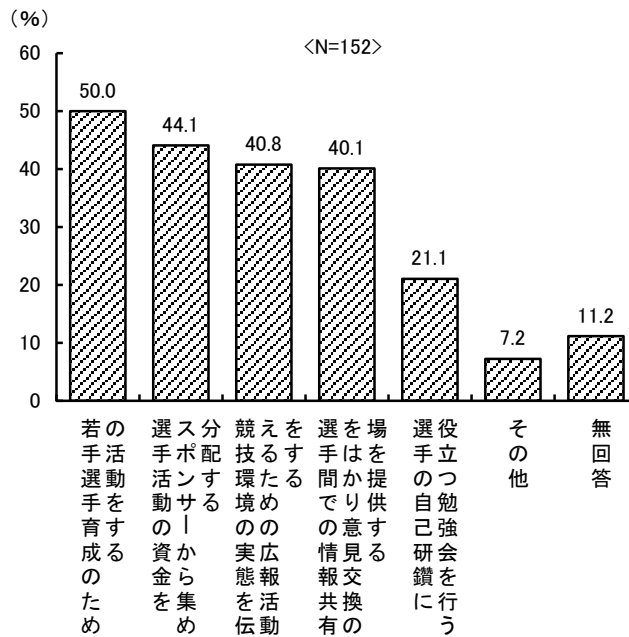
現在、専任コーチが《いる》人では9割弱が「必要」(88.2%)と答え、《いない》人でも「必要」(63.1%)が6割強を占めています。

# IV 選手会等への期待

## 1. 「日本パラリンピアンズ協会」(選手会)に期待する活動は何か

第一に「若手選手育成のための活動をする」(50.0%)

図 18. 「日本パラリンピアンズ協会」に期待する活動 (複数回答)



性別	男性 <n=97>	53.6	49.5	43.3	40.2	17.5	7.2	10.3
	女性 <n=53>	41.5	34.0	37.7	39.6	28.3	5.7	13.2
年齢	29歳以下 <n=51>	54.9	37.3	51.0	39.2	17.6	3.9	13.7
	30~39歳 <n=58>	50.0	43.1	44.8	44.8	22.4	5.2	8.6
	40歳以上 <n=39>	43.6	56.4	25.6	35.9	25.6	12.8	7.7

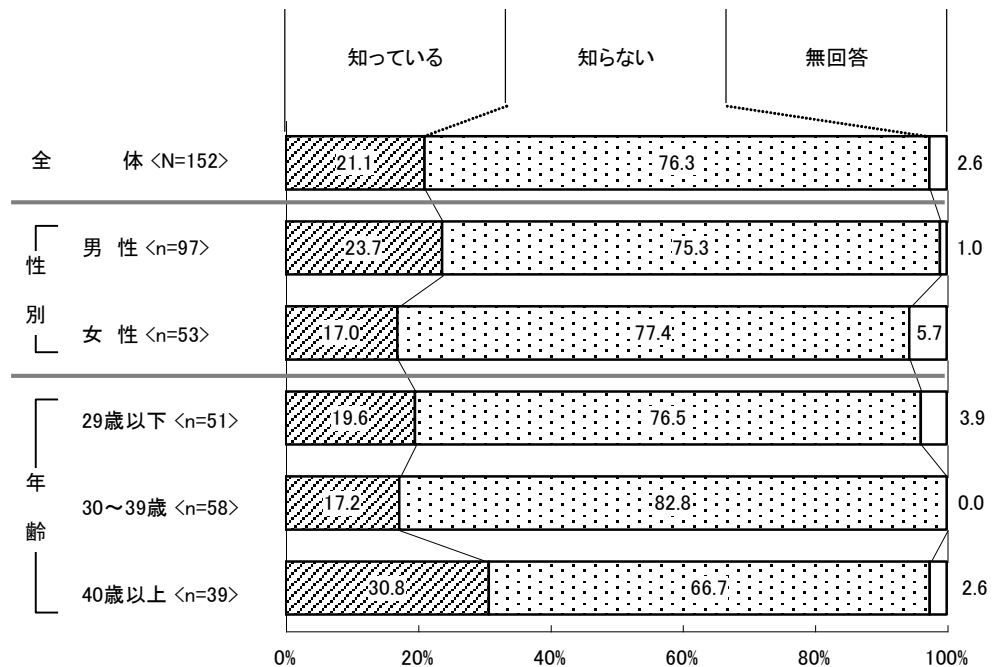
全員に、「パラリンピアンズ協会」に期待する活動は何か聞いてみたところ、「若手選手育成のための活動をする」(50.0%)が半数で最も多くなっています。以下「選手活動の資金をスポンサーから集め分配する」(44.1%)、「競技環境の実態を伝えるための広報活動をする」(40.8%)、「選手間での情報共有をはかり意見交換の場を提供する」(40.1%)が続いています。

## 2. 「アスリート委員会」

### 2-1. 「アスリート委員会」の認知度

「知っている」(21.1%)人は2割強

図 19. 「アスリート委員会」の認知度



I P C (国際パラリンピック委員会) に、「アスリート委員会」があるのを知っているか聞いてみたところ、「知っている」(21.1%)は2割強に止まっています。

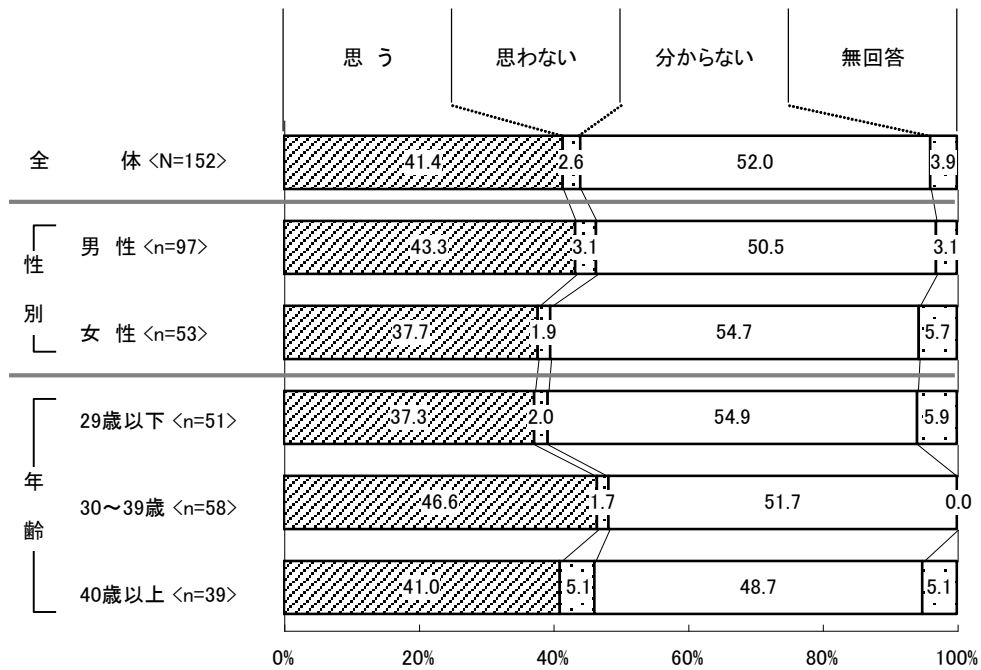
年齢別では《40歳以上》の認知率(30.8%)が高めです。



## 2-2. 「アスリート委員会」に日本から代表を送り出したいと思うか

4割強が「思う」(41.4%)

図 20. 「アスリート委員会」に日本から代表を送り出したいと思うか



次いで、「アスリート委員会」に日本から代表を送り出したいと思うか聞いてみたところ、「分からない」(52.0%)が過半数を占めていますが、「思う」(41.4%)が4割強で、「思わない」(2.6%)はごく少数です。

## 1. パラリンピックや障害者スポーツの今後についての要望や夢（自由回答）

「オリンピック(選手)と同等の扱い」「一般の人への広報活動・社会的認知」「競技人口の底上げ」など、健常者のスポーツと同じ環境になってほしい

## ■回答（抜粋）

- ・オリンピック選手と同等の環境（射撃）
- ・オリンピック同様に一般の人に興味を持ってもらえるような競技大会にしたい（陸上・フィールド）
- ・オリンピックと同じ扱いになってほしい（アルペンスキー）
- ・オリンピックとパラリンピックの扱いが違う。格差があり、特にお金の助成がない（水泳）
- ・現在のパラリンピックはアスリートとしての意識が高まってきている。しかし、オリンピックに比べて認知度が低い。また、資金不足などオリンピックとの差が大きい。オリンピックと対等な扱いになるように、組織の運営方法や選手自身の競技力の向上が必要だと思う（アーチェリー）
- ・健常者と変わらない扱いと、選手一人一人がアスリートとして、日本代表として誇りを持って戦ってほしい（陸上・トラック）
- ・健常者のフィールドで（同じ土俵で）障害者レースも行わなければならないと思う。ルールなど縛るものだけではなく、選手の選考の方法や大会数の増加、報奨金などについて見直し、「オリンピック=パラリンピック」になるべきである（陸上・フィールド）
- ・一般大会との合併。民間での若手選手育成のための活動を行いたい（陸上・フィールド）
- ・オリンピックと同時開催に（ゴールボール）
- ・オリンピックの種目として出場したい（車椅子バスケットボール）
- ・今後、オリンピックとパラリンピックをわけて運営するのではなく、オリンピックとしてその中で障害者の競技も行ってほしい。日本国内も同様だ（陸上・トラック）
- ・障害者スポーツと表現せず、スポーツと表現できるようになることが理想。パラリンピックという言葉もなくなるとよいと思う。全てオリンピックで統一できればよい（シッティングバレーボール）
- ・障害者スポーツという枠にとらわれず、一般のスポーツと同じように観戦するお客さんがいたり、プロ選手がいたり、周りを取り巻く環境が変わっていけばよいと思う（ウィルチェアーラグビー）
- ・マスコミは福祉としてではなく、スポーツとして捉えてほしい（ボッチャ）
- ・一般の競技と同じように出場資格のハードルを高くし、レベルを上げてほしい（陸上・マラソン）
- ・障害者スポーツという枠組みを超えて、一般のスポーツ界で通用する競技者のみが参加できる大会がパラリンピックとなるよう、国内の選考基準をもっと厳しくするべき。ナショナルチームの価値を上げ、まずはそこを選手が目指すように（陸上・トラック）
- ・パラリンピックを目指している人達はリハビリの延長ではなく競技選手としてパラリンピックを目指し、練習、競技を行っているので、行政やマスコミ、一般の人々に認めてもらい、オリンピック選手と同等の扱いを受けられるようになりたい（射撃）
- ・いろいろな競技・選手団体を巻き込んで、イベント・講演を開催し、パラリンピックや障害者スポーツを多くの人に理解してもらうこと。まずは行動することが大事だと思う（車椅子バスケットボール）
- ・オリンピックと同等の世間への認知（陸上・マラソン）
- ・オリンピックのように誰もが皆知っているようになりたい（車椅子バスケットボール）
- ・オリンピックのようにメディアでPRしてほしい（ボッチャ）
- ・競技の難しさと楽しさなど、一般の人々に多く広まってほしい（ノルディックスキー）
- ・この競技が誰でも知っているスポーツになってほしいというのが夢（ボッチャ）

- ・社会での認知度が上がってほしい。費用の負担をなくしてほしい（車椅子バスケットボール）
- ・障害者スポーツのことを広く一般の人にも知ってもらいたい。中央中心的でなく、地方の選手の練習環境にも力を入れてほしい（シッティングバレーボール）
- ・障害者スポーツ発展のため、広く一般に知られるように広報活動をしてほしい（射撃）
- ・組織、団体、運営について知らないことが多すぎる。周知のための広報に力を入れてほしい（車いすテニス）
- ・もっと一般の人達に知ってもらいたい。パラリンピックの競技の生放送をしてほしい（陸上・フィールド）
- ・競技の普及などの目的で広く参加者を集めて、選手の裾野を広げていくことが必要。しかしパラリンピックなどを頂点とする高いアスリート意識を持つ選手には、競技環境の整備、金銭的補助などを図ってほしい（射撃）
- ・ジュニアの育成、現役選手のサポート。現役を終えた選手などすべての選手同士も協力し合い、競技の底上げを図る（車椅子バスケットボール）
- ・障害者スポーツを本当の意味で競技レベルまで引き上げる、全体的な底上げを行うこと（水泳）
- ・スポーツをするにあたって年齢について考えると、やはり若い人達に世界に羽ばたいてほしいという願いがある。また、経済面や仕事を考えると大変厳しい状況なので、もっと考慮してもらえればよいと思う（卓球）
- ・パラリンピックはまだ認知度・価値において低いのが現状なので、オリンピックに近づけるよう、選手側からも行動を起こしていかなければならないと思う。そのために「選手会」という団体の発言が大きいと思うので、社会や競技団体に対してもっと活性化していければと思う。また競技においては、練習環境や資金面での向上はもちろんだが、次世代選手の育成を課題としていくべきだと思う（陸上・フィールド）
- ・より多くの選手がスポンサーなどをもち、競技に集中できるような環境ができればよいと思う（アルペンスキー）
- ・一般スポーツ選手のようにプロ化するなど、もっと理解や興味を持ってもらいたい（車椅子バスケットボール）
- ・仕事とスポーツの両立は大変だ。職場の理解をもっと得たい。それかスポーツで食べて行ける環境があれば最高だ。スポーツに専念できる環境がこの先もっと増えてほしい（ウィルチェアーラグビー）
- ・プロとして競技に打ち込んでいける環境がほしい。他国と比べて環境が非常に悪く、その中で戦ってきている。今以上に環境を整えば必ず今以上の成績を出すことができると思う（アルペンスキー）
- ・健常者競技団体と障害者競技団体との選手強化体制の統一と、一般企業の障害者スポーツへの理解がこの先進んでほしい（自転車）
- ・障害者スポーツといえば水泳、陸上、バスケと思われがち。また、車椅子の人が、という考えが蔓延している。もっと広い目で見てもらえるように、どんな競技にも光が当たるよう考えるのも必要なのではないか（競技名無回答）
- ・障害者スポーツの所管を厚生労働省から文部科学省に移してほしい（陸上・フィールド）
- ・障害のクラス分けを極力なくし、メダルの価値を上げてほしい（アイススレッジホッケー）
- ・点字使用者には書類などを点字でほしい（水泳）
- ・何事も選手目線で行ってほしい（アーチェリー）
- ・日本でのパラリンピック開催、及びメダル数世界一を望む（水泳）
- ・パラリンピックに限らずスポーツ全般に対しての国のサポートと、スポンサーのサポートをより活発にしてほしい。税制面での優遇など（車椅子バスケットボール）
- ・パラリンピックの魅力をもっと多くの人に知ってほしい。障害を持っている人、新たに受傷した人達が生きる希望を持つきっかけとなってほしい。健常者・障害者という区別をする必要がない社会になってほしい（アルペンスキー）
- ・陸連の競技に対する意識のレベルが低いと感じる。選手への意識調査・メンタル調査をしているが、スタッフ側の意識調査の必要性を感じる。ごくわずかだが、高い意識を持ったスタッフもいるが、まだまだ少なすぎると思う。夢はJOCとJPCの合併（陸上・フィールド）
- ・リハビリの延長ではなく、真のアスリートへの道を歩むこと（射撃）
- ・練習環境、競技団体の組織力・経済力、スポンサーなど金銭面などが少しでも改善できればと期待している（ウィルチェアーラグビー）